

京都薬科大学は、薬剤

耐性(A.M.R)対策をテ

マにしたシンポジウムを

開催。府内の医師や薬剤

師、行政担当者など医療

関係者に、A.M.R対策の

地域ネットワーク整備を

呼びかけた。2016年

4月に策定されたA.M.R

対策アクションプランに

は、地域連携の推進が明

記されているが、体制が

整う地域は全国のおよそ

半数にとどまっている。

薬剤耐性菌は、患者が地

域の各施設を行き来する

ことで広がるため、関係

機関が地域ぐるみで抑制

する必要がある。当日は

関係者が今後の連携のあ

り方について認識を共有

した。

「地域の関係者らが互

いに「顔の見える」関係

を築いて対策を進める必

要がある」。藤友結実子

氏(国立国際医療研究セ

ンター病院A.M.R臨床リ

ファレンスセンター)は

対策の地域ネットワーク

# 地域一体でA.M.R対策を

## 京都薬大でシンポ開催

シンポジウムでこう強調

した。

藤友氏はモデルとなる

地域を紹介。抗菌薬の乱

用を減らそうと取り組む

静岡県のA.M.R制御チー

ムと、保健所をハブとし

て医師会や薬剤師会、家

畜保健衛生所などをつな

ぐ佐賀県唐津東松浦地区

のネットワークを取り上

げた。

藤田直久氏(京都府立

医科大学病院感染制御・

検査医学教室)はA.M.R

対策の地域ネットワーク

構築は急務として連携を

呼びかけた。

05年、府内の病院でバ

ンコマイシン耐性腸球

菌(V.R.E)に感染する

患者が集団発生した。当

時、大学病院を中心とす

る調査班に参加した藤田

氏は、行政や医師会、保

健所などと連携すること

でV.R.Eの蔓延を阻止で

きた経験を踏まえて「同

様の活動でA.M.Rの蔓延

を阻止できると推測され

る。早期に連携を始める

必要がある」との考えを

示した。

同院薬剤部の小阪直史

氏は「全ての施設で取り

組まなければA.M.R対策

は成功しない。ネット

ワークに参加するメリッ

トを共有しながら進めて

いきたい」と語った。



薬剤師と看護師らが寸劇で抗菌薬の適正使用を市民に啓発した

用できる体

制の整備を

構想してい

る」との見

解を示し

た。

シンポジ

ウム終了後

には市民公

開講座が開

かれた。近

隣の医療機

関で働く医

師や薬剤

師、看護師ら

が、抗菌薬

の効果や正しい服薬の方

法について寸劇を交えて

説明。参加した市民は「抗

菌薬が力ぜに効かないと

は知らなかった」などと

話した。

野田博之氏(内閣官房

新型インフルエンザ等対

策室)は「現在は関係機

関がA.M.R対策の実力を

養う段階にあるが、今

後、行政が核となり、地

域の医療資源をうまく活